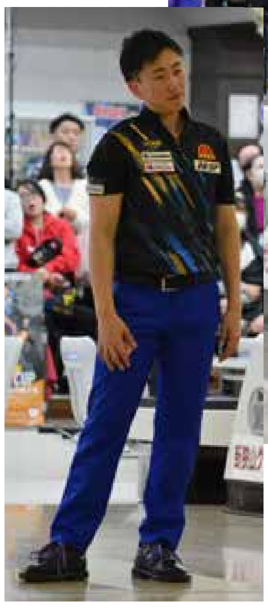
HANDA CUP第57回全日本プロボウリング選手権

12月8～10日／新狭山グランドボウル

新人 宮澤拓哉が全日本制覇で初タイトル

2023年の男子プロツアーを締めくくる『第57回全日本プロボウリング選手権大会』が、今年度ランキング上位者ら、出場資格を有する96名によって争われたが、ディフェンディングチャンピオンの藤井信人を下して頂点に駆け上がったのは、デビュー1年目の新人・宮澤拓哉（61期・上武大学／サンブリッジ）だった。（共催：（公社）日本ボウリング協会／一般社団法人国際スポーツ振興協会）

◀▲プロ初タイトルが全日本選手権に「うれしい気持ちと信じられない気持ちが半々」と宮澤



◀▲決勝レーンのアジャストに苦戦した藤井「決勝のレーンに関しては彼の方が合っていたし、上手でした」と勝者を称えた

予選PartⅠ（12G）、PartⅡ（6G）、PartⅢ（6G）の上位36名を準決勝に選出、準決勝12Gの36Gトータル上位4名が決勝に進むという長丁場、しかもPartごとに異なるパターンのスポーツコンディションで行われる、神経をすり減らす闘いだった。紛れの少ないフォーマットだが、対応を誤れば、今シーズンをリードしてきた山本勲が予選落ちするなど、実力者も容赦なく飲み込まれていった。

初日の予選PartⅠは33位とやや苦しいスタートとなった連覇を狙う藤井信人だが、PartⅡの1G目にパーフェクトで急浮上、予選を1位でクリアすると、準決勝でも首位の座を明け渡すことなくトップシードを決めた。予選を5位につけた宮澤が、準決勝は全体1位の2715を打って、藤井には及ばなかったが、堂々の2位で進出。残る2枠は、最終Gまでまったく予断を許さない激戦だった。その最終G225を打った渡邊雄也が3位で進出、準決勝10G目に298を打って圏内に飛び込んできた福丸哲平が4番目の座をキープした。

デビュー2年目の大久保雄矢は福丸から4ピン差で次点に、また予選を2位通過の川添奨太は、準決勝で大苦戦、最終シリーズに734を打って猛追したが、大久保と同ピンの6位にとどまった。またシードをめぐって悲喜こもごもの争いもあったが、正田晃也が最後の24番目で19年目にして初のシード入りに、ランクシーカーの実況席で涙する姿もあった。

4位決定戦

福丸が2フレからフォースでリードを奪う。追いかける渡邊は、後半右はストライクがくるものの、左レーンでストライクを奪えない。「ここで持ってくれば、というチャンスは何回かあったけど、微妙な変化に対応できなかった」と渡邊。福丸が217：199で制して勝ち上がった。

3位決定戦

「4位決定戦はそこそこうまくいったけど、そこからさらに変化してきて、対応が後手後手に回ってしまった」と振り返った福丸。4、6フレと2つのカバーミスも、宮澤を楽にしてしまった。5フレから初のダブルを持ってきた宮澤は、8フレからのターキーで228：179と快勝、優勝決定戦に駒を進めた。

優勝決定戦

1、5フレと右レーンをスプリットでつまずいた藤井は「出し切らないとダメだとはわかっていたけど、薄めでスプリットになって悩んでしまった」。7フレからターキーで追い上げるも、10フレは「予想外」のビッグフォー。ノーミスで2つのダブルの宮澤が217：174で再優勝決定戦に持ち込んだ。

再優勝決定戦

1フレからフィフスとさらに勢いを増す宮澤に対し、3、4フレをダブルの藤井は、5フレはスプリットになりそうなところを②が倒れ難を逃れたが、同じ左レーンの7フレ、薄めで痛恨の②⑧⑩スプリット。宮澤も8フレはスプリットでオープンを作ったが、226：197で藤井を下し、初タイトルを奪取。全日本の優勝者に贈られる金枠ワッペン、そしてポイントランキングが大会前の32位から11位までジャンプアップして、シード入りも果たすなど、デビューイヤーを最高の形で締めくくった。

▲「決勝に残ること自体がすごく難しい大会で、ひとつの目標だったので、残ることができてそこはうれしかった」と福丸

▲「去年は予選落ちで最終日のレーンは経験できていなかったけど、ビッグは少なくてもうまく投げられたと思う」と渡邊

▲新人とはいえ、ナショナルチームでの豊富な経験もあってアジャスト能力の高さを見せつけた

●決勝ステップラダー

- 渡邊 雄也 199 – 福丸 哲平 217
- 福丸 哲平 179 – 宮澤 拓哉 228
- 藤井 信人 174・再197 – 宮澤 拓哉 217・再226
- 優勝 宮澤 拓哉

●再優勝決定戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
藤井 信人	X	7 /	X	X	9 /	X	⑦ 2	X	7 /	X 9 /
	20	40	69	89	109	128	137	157	177	197
宮澤 拓哉	X	X	X	X	X	9 /	X	⑧ 1	X	⑧ / 9
	30	60	90	119	139	159	178	187	207	226

●優勝決定戦

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
宮澤 拓哉	X	9 /	X	9 /	X	X	8 /	X	X	9 / X
	20	40	60	80	108	128	148	177	197	217
藤井 信人	⑧ 1	7 /	9 /	X	⑧ 1	9 /	X	X	X	⑥ －
	9	28	48	67	76	96	126	152	168	174

今月の表紙 優勝・宮澤拓哉

最終日のミディアムパターンは、ゲーム数が進むにつれてだんだん自分の好きなラインになってきたので、これは行けるぞみたいな気持ちはありました。ただ決勝のレーンはかなり遅くなっていて、あれだけ角度がつくとピン飛びに自信はなかったけど、思った以上にピンが飛んでくれた。3位決定戦のときはちょっと転がして投げていたけど、優勝決定戦は奥まで行ってほしかったのでロフト気味に投げて、最後はそれでもダメになってボールを替えた。相手が藤井プロだし、普通なら緊張で気持ちが悪くなったりするけど、投げていて楽しいなと思えた。

大会をとおしてうまくアジャストできたけど、ナショナルチームに入っていなければ、いろんなスポーツコンディションで投げる機会もなかったと思うので、きっと今回の優勝もなかった。プロ1年目は自分の調子はよかったけど、新人戦の2位などモヤモヤした気持ちもあったので、最後に優勝できて最高の1年になりました。それにしても1年目で全日本優勝は信じられない。周りの見る目も変わってくると思うので、これまで以上にしっかりとやっていきたいと思います。

優勝ボール：ブランズウィック カンタム・EVO・レスポンス